

フィラテリスト梅棹忠夫を読む

小川 義博

昨年の夏、長女が“お父さんが読んでおけ
といった本の著者でお父さんを厠オタクにし
た人の追悼特集を組んだ本がでてたわよ”と
いって1冊の雑誌を手に来宅した。『考える
人』No.37 追悼特集“梅棹忠夫「文明」を
探検したひと”新潮社であった。戦後思想の
古典である『文明の生態史観』を著し、豪華
なイス便器をみせて排泄習慣への興味を起こ
させてくれた大阪千里の国立民族学博物館の
創設に尽力、初代館長であった梅棹忠夫氏の
追悼特集号であった。読んでいく中に「収集
癖と放下（ほうげ）」という章があり下記
のような文章が目に入ってきた。

……著作『メディアとしての博物館』（平
凡社）を取り出し、あるページを開いた。「爽
快なる無所有」という一節に、彼は高校在学
中、所蔵していた数千個体の昆虫標本を全
部、屑箱に捨てたと書いている。……「コレ
クターというものの根本にある情熱は、やは
り所有欲であろう。あるいはそれを所有して
いるのが自分であるという、私有欲である。
わたしにはそれが欠落していた。昆虫の標本
も植物の 葉も、自然界にわたしの目をひら
かせてくれたきっかけにすぎなかった。あと
はぬげがらにすぎない」

梅棹は、博物館長になって二万冊ほどの蔵
書を博物館の図書室に寄贈した。「わたしは
本のコレクターでさえもなかった。本もよん
でしまえば、あとはぬげがらである」梅棹は、
苦勞して集めたものを、ある時期になるとす
べて放棄する。コレクションがある閾値に達
すると、収集を通して得たものが量から質に
転化し、新しい次元に到達する。そのとき梅
棹は「脱皮」して、新たな地平に向けて歩き
始める。集めたものは、抜け殻にすぎない。
禪でいう「放下」の精神である。（外岡秀俊「無
所有」貫いた孤高のハンター）

ふと頭に故大谷博会員と梅棹氏との切手収

集について対談が思い浮かんだ。「月刊みん
ぱく」1985年12月号に載った「切手は知
識の巨大な宝庫」と題した対談である。これ
は他の対談と一緒に編集され1989年『梅棹
忠夫対談集「知」のコレクターたち』になり
講談社から発行されている。さっそく、読
み返してみても大阪市立大助教授時代の病氣
で2年間の療養中に友人たちから切手をも
らって集めだしたと話している。水原賞をう
けた大コレクター大谷会員と対等に話されて
る内容からかなりの切手の知識を持っている
ことと、使用済み切手をジェネラルに集めて
いることがうかがわれた。さらに、1枚の切
手から話される内容の豊かさを感じ取れる、
そして、切手収集とは児童でなく、大人の趣
味であること、美的対象から知的対象とし
て切手発行が近代史、現代史を反映している
知識の泉に成りうることをお二人は指摘して
いる。この対談を読みおわって、30数年前
にこの対談内容を知りながら自分の切手収集
は所詮、児童に過ぎなかったかと反省させら
れると同時に、梅棹氏が切手を集めていたこ
と、そしてこの対談内容が稲フィラでの会合、
飲み会で耳にしたことがないことが気になっ
た。そこで下ネタから学際的に広く知識を持
つ青柳会員に問うと意外にもご存じないとい
う。それではぜひ会員に知っていただこうと
キーボードに向かった次第である。

“月刊うめさお”と称されるほど多くの著
書を発行している氏の文章をすべて読むこと
は不可能なこと、切手を学術的な文章の中
にさり気無くふれているものをいくつか目に
しているのがフィラテリストとしての梅棹忠
夫を紹介してみたい。

前述した『知のコレクターたち』でナイフ
のコレクターとの対談の中で氏が“それから
有名な刃物に、ネパールのククリという刃が
ありますね。湾刀の一種ですが、ネパールの

ひとつのシンボルになっていまして、切手の図柄にもなっています。”と発言している。

さっそくスコットに目を通したが見つからない。よくよく見るとなんとネパール一番切手の説明に Sripech and crossed Khukris の説明があり、とてもスコットの写真からでは探せる切手ではない。かなり切手をていねいに扱っているフィラテリストであることを教えてくれている。

京都大学霊長類研究が戦後大発展をしたことから日本人の自然観を論じた論文『高崎山』の中にも見いだせる。日本人の意識の中に神の存在が西洋人に比べ薄いことで動物との断絶感がなく、サルにはある種の親近感を持っていること、そして、その背景にヨーロッパ、中近東にサルが生息していないことを述べているのが印象に残っているものである。その『高崎山』のはじめのほうに「高崎山の運命」という章がありその中に次のような文章がある。

わたしはじつは、妙なことから高崎山の名をまえからしっていた。戦後に発行された日本切手のなかに、収集家仲間て「別府」と略称されているのがある。凹版、ニど刷、おなじ図がらで、色のちがうのが二種類でた。現代の日本切手にしてはめずらしく、幅ひろの額縁がとってあって、その額縁の色が、二円のが濃紅、五円のが暗緑だった。精密な線のうえに、凹版特有のインキのもりあがりがつくしかった。

額縁のなかは、別府湾だった。山を背景に、しずかな海と、その海にうかぶ船があった。船は、瀬戸内海をかよう遊覧船であろうか。

背景の山は、いまにもむっくりとたちあがろうとしている恐竜の背なかのように、特徴



のあるもりあがりを見せていた。山は、まわりから孤立して、海岸ぎりぎりだった。

切手にはもちろん、山の名なんかはかいてない。わたしは地図をしらべた。わたしは別府にいったことはないけれど、このかっこうの山なら、地図の等高線から、すぐに判定がつく。それは、高崎山にちがいがなかった。

「別府」の切手が発行されたのは一九四九（昭和二四）年の春である。それは戦後の日本切手における観光地シリーズのはしりであった。耳紙に英語の宣伝文句をいれた、ずいぶん露骨な観光宣伝切手であった。そのまんまに、おおきくえがかれているのだから、その当時においてすでに、高崎山は、観光地別府における代表的風景と見なされていたのだろう。しかし、それはどこまでも、大観光地「別府」の背景のひとつというだけのことであって、だれも高崎山の切手をつくろうとしたのではなかったはずだ。山自体には、なにも特別の意味はなかったのである。

切手の原画は中村研一画伯がえがくところの油絵であるといわれる。その中村画伯も、別府市長も、郵政審議会の切手図案審査委員たちも、郵政大臣も、要するにこの切手の発行に関係したすべての人たちが、この山がまさか今日のようなことになろうとは、だれひとり夢想もしていなかったにちがいない。10年たらずのあいだに、高崎山の運命はまるきりかわってしまったのである。

高崎山の運命をかえたのは、サルである。野生のサルの大群があらわれたのである。人びとは、わきたった。サルは、たちまち天然記念物になった。高崎山は、たちまち国立公園になった。日本唯一の、国立自然動物園になった。おびたしいひとが、毎日この山のサルをみにくるようになった。高崎山はもはや別府の高崎山ではない。温泉の別府とならんで、サルの高崎山は、それ自体がユニークな観光地になったのである。

わたしがここにやってきたのは、もちろん切手の図がらを実地にたしかめるためではない。高崎山の運命をかえた、そのサルたちをみるためにやってきたのであった。

そして、霊長類研究から科学史におよび、この研究が伝統的、土着的科学であること、

そして、ヨーロッパの状況を「中立化と参与」という題で

・・・ヨーロッパの場合にも、おなじように、狩猟者のナチュラル・ヒストリーの体系的科学への昇華ということはあった。というより、それは生物学の本流のひとつでさえあったかもしれない。

たとえば、イギリスはむかしからトリの愛好者のひじょうにおおい国であるが、その、トリに関するナチュラル・ヒストリーの膨大な知識の蓄積のうえに、伝統的なイギリスの鳥学、あるいは鳥類保護学と、あたらしい現代の動物行動学がたっているのである。先日、日本で国際鳥類保護会議がひらかれ、記念切手まで発行されたが、それはまったくイギリスの土着科学のみごとな開花であった。

哺乳類に対するときも、もちろんおなじようなことがある。(後略)

もちろん 日本切手だけではない。大谷会員との対談で中国の1980年発行古代科学者



3次切手シリーズ
4種のうちの1種
黄道婆に関してその
生い立ちから紡績技術
をひろめた経緯まで詳
しく語っているように
外国切手にもかなり
くわしくしらべ

られていることがわかる。京都府の綾部市に戦前生まれ大弾圧を受けながら戦後力強く復活し、綾部市が日本で最初に世界連邦平和都市宣言を行う背景になった大本教（おおもときょう）について著した「綾部・亀岡—大本教と世界連邦」（1960年）の中で自分はフィラテリストであるとのべて1枚の切手を題材に宗教について文章を著わしている。

ブラジルにて——『精霊の書』

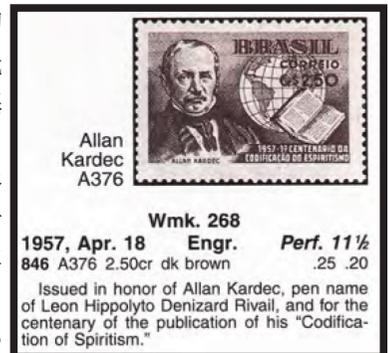
話は、南米にとぶ。わたしは、ひとりのフィラテリストとして、世界で発行される切手に、いつも関心をもっている。ブラジルという国は、あんまりうつくしくもない切手を、むやみと発行する国だが、一九五七年に、ひとり

の人物の肖像と、地球儀と、書物の図案の、一枚の記念切手を発行した。人物は、アラン・カルデックというひとである。スコットの『標準郵便切手カタログ』をしらべてみると、「アラン・カルデック」——本名はレオン・イポリート・ドニザール・リヴェイル——をたえ、その著『心霊主義（スピリティズム）の法典』の出版百年を記念して発行」とある。(中略)

霊の世界の存在を信ずる心霊主義者たちは、世界各国にいるが、とりわけブラジルでは、ひじょうな勢力である。100にあまる心霊主義の雑誌が発行されているという。そして、ついに政府にせまって、前記のアラン・カルデック切手を発行させるにいたった。もちろん、ブラジルはカトリック国であるから、その教団との摩擦なしというわけにはゆかない。とくに、僧職者たちの妨害ははげしいようである。しかし、一般大衆は、カトリックといえば単なる宗旨であって、無信仰というのと同義にちかい。宗旨と信仰はべつのものである。

参考文献に Scott カタログ 1959 年版 vol.1 を記している。

さらに切手収集が氏の知識の基礎になったことを大谷会員との対談の14年も前に明らかにしている。



海外旅行が盛んになってきた1971年朝日新聞主催の公開講座「朝日ゼミナール 海外旅行と私」で本多勝一、松本清張、平山郁夫氏等ともに講演をしている。

テーマは「海外旅行入門」。のちに文化勲章受章した民族学者の知の巨人梅棹忠夫がその地理、歴史の知識が切手収集に負うところが大きいと講演後の受講者からの質問に答えた中で述べている。

問 先生は『知的生産の技術』というような

著書をだしていらっしゃるんですが(註)、海外旅行の技術論としていちばんたいせつなポイントはなにか、いくつかお話しできれば……ということなんです。たとえば知的生産についてのいわゆる「京大式カード」というような、物的なアイデアだとか、あるいは準備だとかいうふうなもののおありになるか、どうか、おうかがいしたいとおもいます。

答 いろいろ具体的な技術も開発されているんですけども……。そうですね、ちょっとかわったことをひとつ、わたしがやっている方法をもうしあげましょうか。あのね、わらわれるかもしれませんが、切手をあつめているんです。これは、ひとつの技術ですね。世界じゅうの切手を、とにかくあつめるんですね。

切手というものは、どこの国でも、自分のところはこれを世界にだしたいんだという一種のセリング・ポイント(売りこみの要点)を切手にしているものなんです。あれをひとつずつ、これはいったいなんであるかということをしらべてゆく。そうすると、日常のたのしみと同時に、いつのまにか世界のそれぞれの国の特徴とか、あるいは状況、世界になにをうったえたいかというようなことがひじょうによくわかるんです。歴史もわかるんです。

これはまあ、じつはうちあけ話ですけど、わたしは、仕事との関係もありますが、世界じゅうの地理と歴史にかなりつよつもりですがね、それは切手のせいなんです。すこし日常気をつけて持続的にやれば、ずいぶんの知識が頭にいつの間にか蓄積される、たのしみながら。そういうのもひとつの技術になるんじゃないですか。海外旅行をして切手を買うのを、ただ単にそのときそのときのおみやげとして、あるいは、おもいでとして買うというのはね、ほんとはもったいないんです。

だいたい切手がではじめたのはいまから100年ほどまえ、各国とも100年しか歴史がないんですが、その間に発行されたのを断片的でもいいですから、すこしずつあつめてゆく。そうすると、われわれがすんでいる世界の全体像が、かなりはっきりと頭のなかでできます。わたしはそういう方法で、たとえば、アフリカの、あのひじょうにややこしい新興諸国家ですね。どの国はどのような格好をして、

どの国の隣がどうなって、どこが首府だというようなことは、だいたい全部しらんに頭にはいっていますわ。こういうのも、外国旅行の、なんといいですか、準備のためのひとつの技術になるかとおもうんですが……。 (後略)

さらに、『行為と妄想--わたしの履歴書』中公文庫で比較文明論という章の”肺結核になる”という文章の次に氏の切手収集を著している。

切手あつめ

仕事は禁じられていたが、床にふすことはなかった。退屈をまぎらわせるために、わたしは郵便切手をあつめることをおもいついた。これにはエスペラントがおおいに役にたった。わたしはエスペラントの雑誌の文通希望欄からアドレスをひろい出して、せっせとエスペラント語で手紙をかいて世界じゅうにおくった。

わたしは家じゅうにある郵便物から切手をはがして、まず日本切手のコレクションをつくった。これで外国の切手と交換しようというのである。やがて海外から続々と反響がきて、わたしのコレクションは急速にふくれあがっていった。このたのしみごとは現在にいたるまでつづいている。切手あつめにはふたつの流儀がある。ひとつは植物とか鉄道の機関車とか、テーマをきめてあつめるやりかたでトピカルという。それに対して、テーマをきめずになんでもあつめるやりかたをゼネラルという。わたしのやりかたは徹底ゼネラルであった。世界じゅうの切手をあつめて、国別、発行年代順に配列するというやりかたである。市場価値からいえば、未使用切手は使用済みなものより高価なのがふつうである。わたしは未使用か使用済みかには、まったくこだわらないことにした。ストックブックもアルバムもすべて自分でつくった。時間はじゅうぶんにあった。

切手は世界の地理と歴史についての巨大な知識源である。一枚の切手にはおびただしい情報がもりこまれている。それをながめているうちに、わたしは世界の地理と歴史にひ

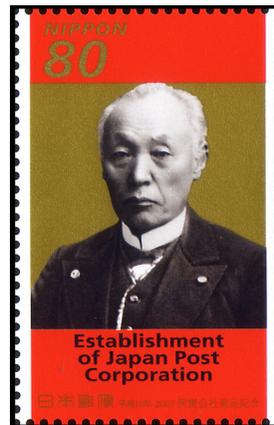
じょうにつよくなった。全世界の切手を網羅した大部のカタログも出版されている。各国別のもある。専門の雑誌も何種類もあった。収集家の会もいろいろある。わたしはそのひとつ日本郵趣協会というのに入会した。そして、ずっとのちのことだが、その顧問になった。

切手あつめにはお金がかかるというが、それは高価な切手を買うからである。わたしのよなやりかたをすれば、多少の参考書と小道具類をかえば、あとはほとんどただである。そのかわり、できあがったコレクションも資産価値はほとんどゼロにちかい。わたしは、趣味はなにかと聞かれたら、「駄切手収集」とこたえることにしている。

郵便物から切手をはがしてあつめることのほかに、わたしはひとつの奇妙なコレクションをもっている。世界じゅうからわたしあてにおくられてきた手紙の封筒を、そのまま保存しているのである。宛名は、当然すべてわたしになっている。世界のすみずみから手紙はきていて、なかには南極点や昭和基地からというものもある。わたしはこのコレクションを「世界がわたしを呼んでいる」と名づけて、大切にしている。こんなものは、わたし以外のひとにはなんの価値もない。まさに自己満足のきわみである。

加えて、1971年『変革と情報 日本史のしくみ』中央公論社の中の「情報網の建設者」の章で前島密についてあまり知られていない業績を著わしている。

日本人で、その肖像画がいちばんたくさん複製されているのは、だれか。一〇〇〇円札の伊藤博文、一〇〇円札の板垣退助などがかんがえられるが、じつはもうひとりいひそかる。前島密がそのひとである。伊藤や板垣にくらべて知名度はややひくいかもしれないが、その顔をみたら、ああこのひとかと、だれもがうなずくにちがいない。その肖像は、現行の一円切手で、お目にかかることができる。現在までに切手に登場すること約一〇回、



枚数にすれば何億枚印刷されたか見当もつかない。

郵便の世界でこれほど前島密がもてるのは、なぜか。それはかれが日本における郵便制度の創始者であり「郵便の父」といわれる人物だからだ。郵政省内では、

かれはいまでも前島先生と先生づけてよばれている。かれは一八三五（天保六）年、越後高田の下級藩士の家にうまれた。赤貧のなかでみずからを形成した立志伝中のひとといってよい。徳川家につかえ幕臣の系譜につらなるが、洋学をまなび英語をマスターしていた開明派であった。江戸城あけわたし後、徳川家とともに静岡にしりぞき、その公用人（マネジャー）となった。一八六九（明治二）年の暮れ、明治政府によびだされて民部省改正局に出仕した。

維新のとき、かぞえて三四歳。このころのかれの面目をつたえるおもしろいエピソードがある。いよいよ新国家の樹立をひかえて、大久保利通は首都を大阪にうつすつもりであった。そのとき、京都にいた大久保に一通の書状がまいこんだ。さしだし人は無名の書生らしいが、江戸遷都論を堂々とした筆致で勧告している。地政学的・経済的・社会的要因を個条がきにして論理はきわめて明快である。これをよんで大久保はたいへん感心し、一夜で江戸遷都をきめたという。

この無名の投書主が、じつは前島密であった。後年、かれが新政権下で活躍しだしてから、大久保が雑談でこのおもいで話を前島にはなしたとき、投書主が前島であったことをはじめてして、なっとくしたというのである。

さらに、郵便が日本で奇跡的な速さで完成したことを前島密によせて論じている。

・・・ゼロから出発してわずか数年で、全

国的に郵便網を完成できたのは、なぜか。その秘密は「郵便」と「切手」というふたつのことばに象徴的にあらわれている。どちらも、前島自身の発案である。「郵便」というのは、むつかしい語である。前島がわざわざこの字をえらんだのは、民営の飛脚便のイメージとの断絶をはかり、郵便は官営事業であることを権威的にしめそうとしたのだろう。地方の名望家をピックアップして、官吏という国家的地位をあたえ、そのひきかえに、ただで郵便局を自宅につくらせたのも、この手である。いっぼう、民衆の積極的利用がなければ、この制度は定着しないから、前島は庶民的な施策もおこなう。すでに関所の通行証などで庶民におなじみの「切手」ということばを、あたらしい意味でつかいだし、また、世界にさきがけて郵便貯金という独特の庶民サービスをおこなったりした。官の権威と民の支持とのあいだの微妙なバランスをたもつことに



昨年末から2月末まで有明の日本科学未来館で「ウメサオタダオ展」が開かれ、そこに自作のルーズリーフを使用したアルバムと受け取った海外からの郵便物を投函地の地図とともに整理したポケットファイルが展示されていた。また、日本民族学博物館梅棹アーカイブズ担当者より次のようなおはなしをいただいた。

「梅棹アーカイブズのなかに、京大型カードに硫酸紙をはり、袋に加工したものがあります。そこには、封筒筒からはがした使用済みの切手が、同種をひとつの袋に入れて保管されています。京大型カードというひとつの規格で切手を整理してその後どうしようとしていたのか、家族も聞いていなそうです。京大型カードに切手の発行情報などが書かれたものは現在のところ見つかっていません。

じっさい、切手に関しては、1986年に失明するまで、みずからの手で自宅でおこなっていた作業で、アルバムに整理されていました。アルバムは、地域別、国別、発行年順に整理されていたようで、最後まで手もとにあ

より、この新システムの奇跡的な進展および定着を可能にしたのだ。前島のおどろくべきプラグマチズムである。この二面的な政策は、その後、伝統として日本の郵便局、郵政省にひきつがれているとってよい。

このように梅棹論文のごく一部を見ただけでもフィラテリストとして切手をいかに大切に扱っていたかが想像される。ここで考えさせられるのが梅棹コレクションのゆくえである。蔵書や他の収集品と同じように量から質への転化をなして「放下」にいたったのであろうか。かりに「放下」をしたにしてもかなりの枚数の切手がB6版の京大式カードに添付されて視覚的情報として知的生産に寄与したのではないだろうか。

数回、国立民族学博物館の食堂で実に上品でもの静かに会話をされながら食事をされていた梅棹氏の姿を目に食事ができたことをなつかしく思い出される。



りました。いまでもそれらは捨てることなく、家族のもとに保管されています。」

引用論文

- 「大本教」『日本探検』1960年11月 中央公論社
- 「高崎山」『日本探検』1960年11月 中央公論社
- 林屋辰三郎、梅棹忠夫、山崎正和（編）『日本史のしくみ－変革と情報の史観』1971年中央公論社
- 『海外旅行入門』週刊 朝日ゼミナール通巻第45号 1971年 朝日新聞社
- 『行為と妄想 --- 私の履歴書』中公文庫 2002年